

International Theatre Conference Forum 2020 in SAITAMA  
世界劇場会議国際フォーラム 2020 in さいたま



参加申込要項

●参加費

フォーラム参加費 2,000円 レセプション参加費 3,000円

●申込方法

参加申込用紙にご記入の上、郵便・faxまたは同じ内容をE-mailにてお送りください。  
フォーラム当日参加費のお支払いをお願いします。

申込締切 **2020年1月24日(金)**

※当日の参加もお受けいたします。ただし参加者多数の場合はお断りする場合がございます。

●会場案内

さいたま市文化センター

〒336-0024 さいたま市南区根岸1-7-1  
Tel 048-866-3171 Fax 048-837-2572  
※電話・Faxのおかけ間違いのないよう十分ご注意ください

JR南流和駅西口下車徒歩7分  
戸田西ICより6.5km/外環流和ICより2.5km  
駐車場137台完備(有料)最初の1時間無料。  
1時間超から1時間30分以内は220円以降30分毎に  
110円を加算します。(10円未満切り捨て)  
※駐車場に限りがございますので、公共交通機関をご利用ください。



申込お問合せ (公財)さいたま市文化振興事業団「世界劇場会議国際フォーラムinさいたま」係  
〒336-0024 さいたま市南区根岸1-7-1 | Tel. 048-866-3467 Fax. 048-837-2572  
E-mail artm@saitama-culture.jp

世界劇場会議国際フォーラム2020 in さいたま 参加申込用紙

ふりがな	性別	年齢	所属団体
お名前	男・女	才	
※団体申込の場合は代表者をご記入の上、参加者名簿をお送りください。			
〒( )	都道府県	区市郡	
ご連絡先	電話 ( ) -	FAX ( ) -	
E-mail			

参加費	フォーラム参加費 2,000円 × 人	レセプション参加費 3,000円 × 人	
	合計		円
請求書 領収書の 宛名	参加費納入に際しての請求書 <input type="checkbox"/> 必要	領収書の発行 <input type="checkbox"/> 必要	

artm@saitama-culture.jp / Fax. 048-837-2572

International Theatre Conference Forum 2020 in Kani  
世界劇場会議国際フォーラム 2020 <sup>in</sup> 可児 | 2020年1月30日[木]~31日[金]  
会場: 可児市文化創造センターala

詳細はwebサイトをご覧ください。 <https://www.kpac.or.jp>



文化庁文化芸術振興費補助金  
(劇場音楽堂等機能強化推進事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会



International Theatre Conference Forum 2020 in SAITAMA

世界劇場会議  
国際フォーラム  
2020 <sup>in</sup> さいたま

2020年2月4日[火]~5日[水]

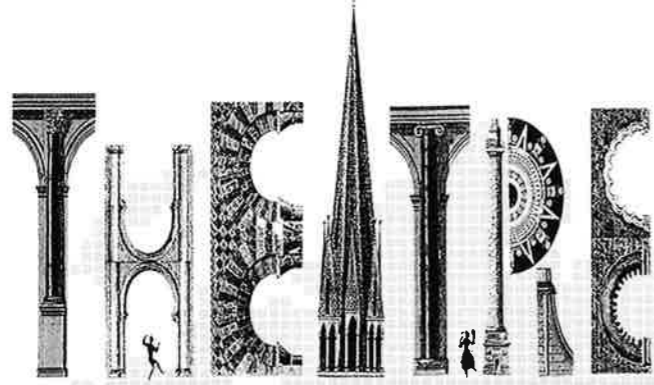
会場: さいたま市文化センター

テーマ  
“文化芸術の社会包摂”、  
その社会的価値をとらえなおす  
~芸術の啓蒙ではなく、持続可能な社会のグランドデザインとして~



主催: (公財)さいたま市文化振興事業団  
共催: さいたま市、NPO法人世界劇場会議名古屋 企画・協力: (公財)可児市文化芸術振興財団  
後援: さいたま市教育委員会、(公社)全国公立文化施設協会





# 世界劇場会議国際フォーラム2020 in さいたま

## International Theatre Conference Forum 2020 in SAITAMA

テーマ

「文化芸術の社会包摂」、その社会的価値をとらえなおす  
～芸術の啓蒙ではなく、持続可能な社会のグランドデザインとして～

2/4  
[火]

〈受付〉12:00 / 〈開会〉13:00  
〈会場〉多目的ホール

13:00~13:10 開会宣言

13:10~13:40 基調講演 I

「文化芸術による社会包摂」その意味を礼す  
衛 紀生

劇場が「社会機関」としてその公益性が期待される時代へと変わりつつあり、貧困、格差、差別、つながりの欠如等に起因する「生きづらさ」や「生きにくさ」からの解放を使命とする。「文化芸術の社会包摂機能」を根底に据えた事業の重要性が求められている。一方、助成金獲得のためのみ事業を実施し、なぜ社会包摂事業が必要であるかという根本的なところを理解せず実施しているところが見受けられる。文化芸術と劇場の社会的な価値をとらえなおし、社会包摂事業の本来あるべき姿を提示する。

13:40~14:10 基調講演 II

「文化芸術による社会包摂」がもたらす社会のグランドデザイン  
中村 美亜

「文化芸術による社会包摂」のビジョンは、社会的に弱い立場にいる人が社会から排除されたり、孤立することなく、共に支えあう社会を作ることにある。違いのある人々を、違いを尊重したまま受け入れ、多様な関係を築くこと、マイノリティの人たちがエンパワメントされる（自己肯定感や自己効力感を高める）、そしてマジョリティの人たちの意識も変化することを指すものである。そういった社会のグランドデザインを描きながら社会包摂事業を展開していくうえで、課題を整理し、これからの展望を語っていただく。

14:20~16:50 Session I

「文化芸術による社会包摂」が劇場に何をもたらすか  
セーラ・ジー、カス・ラッセル、衛 紀生  
【コーディネーター】細井 昭男

英国では、劇場が社会包摂事業を実施していくことで、劇場のソーシャルブランドを高度化し、それによって鑑賞者開発と資金調達の良い循環が起きている。英国での成功体験から社会包摂の本来の考え方とその重要性を再確認するセッションとした。

「レセプション」  
〈会場〉さいたま市文化センター大集会室  
〈参加費〉3,000円  
フォーラムに参加された皆さんが「劇場」をキーワードに様々な意見や情報交換する場として多くの方々の参加をお待ちしております。

17:30  
~  
19:00

2/5  
[水]

〈受付〉9:30 / 〈開会〉10:00  
〈会場〉多目的ホール

10:00~12:00 活動事例報告

「社会包摂事業に関する活動事例報告」  
ジョナサン・ハーバー、栗林知絵子、河合さつき  
【コーディネーター】細井 昭男

今年度夏に実施した、子ども食堂に通う子どもたちとイギリス人との演劇交流プロジェクト「SEE YOU AT LAST」の報告を栗林知絵子氏に、今年度、文化庁新進芸術家海外研修制度によりイギリスのリーズ・プレイハウスで40日間研修し、そこで体験した社会包摂プログラムの報告をアーラの河合さつきから、そしてロンドンオリンピックのレガシーとして誕生した障害者のための世界で唯一の大規模なアンサンブルであるパラオーケストラの活動についてジョナサン・ハーバー氏から報告いただく。

パラオーケストラ & フレンズ  
活動報告映像はこちら



13:00~14:00 Session II

「演劇情動療法による認知症入院患者の治療と減薬効果について」  
藤井昌彦、前田有作、衛 紀生  
【コーディネーター】細井 昭男

演劇情動療法は人の情動に良い刺激を繰り返すことにより、情動の整流化を行い、情動機能の回復、低下を予防する療法である。薬物による対症療法をするのではなく、演劇情動療法でアプローチすることによって、周辺症状を緩和し、そのことで認知症患者が社会と関わりを失わずに暮らすことができるようになっていく。この演劇を活用した療法が、認知症患者への減薬効果や社会的リスクの削減にどれほどつながっているのか、具体的な数値も含めて報告をいただく。

14:10~16:00 総括Session

「2日間の総括セッション」  
セーラ・ジー、カス・ラッセル、ジョナサン・ハーバー、中村美亜、衛 紀生  
【コーディネーター】細井 昭男

すべてのセッションを受けて、参加者とともに、劇場音楽堂等と文化芸術がこれからの社会で果たすべき役割を深掘りする。あわせて「日本版社会的処方箋」はどのように設計されるべきかにも触れたい。これから、私たちはどの方向に、何のために、どのような一歩を踏み出せば良いのかを参加者全員と共有したい。

ご挨拶

可児市文化創造センター館長兼劇場総監督

衛 紀生 Kisei Ei



劇世界劇場会議国際フォーラムは愛知芸術文化センターを会場としていた2012年の「日本に公共劇場はあるか」から昨年の「劇場は社会に何ができるか、社会は劇場に何を求めているか」～文化芸術による社会的処方箋の扉をたく～まで、8年にわたって劇場音楽堂がどのように社会化すべきか、公共的な機関として広く認知されるための経営戦略を持つべきかをテーマに活発に議論してきました。そのプロセスで可児市文化創造センターが「社会包摂型劇場経営」で社会化・公共化の先陣を切ってきました。昨年、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」が公布・施行され、第三次基本方針以降の文化に関する公式文書で繰り返し言われていた「文化芸術の社会包摂機能」が拡がりをみせる契機の一つとなりました。しかしながら、「社会包摂」はあくまでも「手段」であり、どのようなユニバーサルな社会構築を目指すのかの理念なきプロジェクトは、「善きこと」をしているという自己充足と、単なる「ほどこし」にとどまっていることを強く自覚すべきです。障がいを持つ方々が解決したい課題は、「文化芸術活動に参加」することではありません。「孤独と孤立」、「つながりの貧困」、「経済的な生活不安」等を文化芸術活動への参加によって、「変化」というアウトカムを生み出さなければ意味を持たないと思っています。そして私たちは、障がいを「見える障がい」に限定してはいないか自問することが必須です。犯罪被害や被災によるPTSDを抱え込んで「生きづらさ」の中にいる人々、貧困という社会的障壁によって教育格差の中に放置される子どもたち等、「見えない障がい」を視野に入れなければ「理念なき社会包摂」に陥ってしまうと考えます。今回のフォーラムの機会に、皆さまとともに劇場音楽堂の未来形を考えることが出来ればと祈念いたします。多くの方のご参加をお待ちしています。

パネラー・プロフィール



セーラ・ジー Sarah Gee  
芸術文化組織コンサルティング会社インディゴ社業務執行役員  
スピタルフィールズ・ミュージック代表理事  
公益芸術文化組織の分野で25年の経験を持つ。コンサルティング活動に加え近年、東ロンドンを拠点とする芸術チャリティ、スピタルフィールズ・ミュージックの代表理事に指名される。ヨーロッパや日本、中東などでブリティッシュ・カウンシル等が主催する人材育成や会議の統括なども務める。新しい形の資金調達にも関心を持ち、寄付をする人の動機と観客のチケット購入行為との関連性についてのリサーチを行う。RPS（ロイヤル・フィルハーモニック協会）、NCA（公的文化芸術補助金促進運動団体）の理事、ロイヤル・ソサエティ・オブ・アーツ・フェロー。



カス・ラッセル Kath Russell  
ハレ管弦楽団 資金調達部 部長  
コーナーハウスアーツセンターの資金調達責任者、政府特許法人芸術ビジネススポンサー協会北部の主任、ハレ管弦楽団の資金調達部長等を歴任。ハレ管弦楽団に在職中に栄誉ある英国ギネス資金調達者賞を1997年に受賞。ロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団、マンチェスター・ロイヤル・エクステンジション劇場、FACTリヴァプール等で幅広く仕事をこなした後、ハレ管弦楽団の資金調達部長に再任。現在はリーズプレイハウスの資金調達戦略とチームの監督役も務める。



栗林 知絵子 Chieko Kuribayashi  
NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長  
「広がり、こども食堂の輪!全国ツアー」実行委員会代表。2004年より池袋本町プレーパークの運営に携わり地域活動を始める。自他共に認める「おせっかいおばさん」として、地域の子どもを地域で見守り育てるために、プレーパーク、無料学習支援、子ども食堂など、子どもの居場所を点在化して子どもと家庭を伴走的に支援している。



前田 有作 Yusaku Maeda  
劇団LGT主宰、有限会社ラク代表、日本演出者協会会員  
NPO法人日本演劇情動療法協会理事長、演劇情動療法士  
文学座付属演劇研究所第32期生。こまつ座の90ステージに及ぶ公演や映画、TV、ラジオなど数多くの現場を踏む。97年地元仙台に戻り、1999年、翻訳劇を中心に上演する劇団LGTを旗揚げ。せんだい演劇工房10-BOXのこけら落とし公演に出演。2008年宮城県芸術選奨新人賞を受賞。高校、専門学校、養成所講師、武将陣などの演技指導、演出を行う。2013年より、仙台富沢病院において、佐々木英忠教授、藤井昌彦教授指導のもと、演劇情動療法の研究チームに参加し、毎週、同病院にてセッションを続け成果を挙げている。



ジョナサン・ハーバー Jonathan Harper  
パラオーケストラ & フレンズ CEO / エグゼクティブプロデューサー  
文化芸術財団パラオーケストラ & フレンズの2015年創立当時から関わる。パラオーケストラは、プロの障害者ミュージシャンとアーティストを楽団員に含むオーケストラであり、イギリス国内外の劇場及びフェスティバルでの公演を多数行っている。パラオーケストラ以前は、文化の多様性を中核にした、イギリス文化芸術会議、No Boundariesの企画制作担当。その他には過去20年間、文化芸術のマーケティング及びコミュニケーションの業務担当をし、ローリー・アーツセンター、ウェールズ・ミレニアムセンター、プリストル・オールドヴィックなどで活躍。



中村 美亜 Mia Nakamura  
九州大学大学院芸術工学研究院准教授(芸術社会学)  
ソーシャルアートラボ副ラボ長  
芸術活動が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する研究、その知見を生かした文化政策の研究を行っている。学術博士(東京藝術大学)。著書に「音楽をひらくアート・ケア:文化のトリロジー」(氷声社、2013年)など。東京藝術大学助教などを経て、2014年より現職。九州大学ソーシャルアートラボ副ラボ長。2019年3月に、文化庁と九州大学の共同研究の成果として「はじめての「社会包摂×文化芸術」ハンドブック」を刊行。



藤井昌彦 Masahiko Fujii  
東北大学医学部 臨床教授 仙台富沢病院理事長  
認知症の情動機能の活性化により症状の改善をもたらす「認知症情動療法」を提唱する。医学博士。1999年から認知症専門病院を運営する医療法人東北医療福祉会理事長。日本老年医学会代議員、東北大学医学部臨床教授も務める。現在、仙台富沢病院統括理事長、NPO法人日本演劇情動療法協会理事、社団法人日本認知症情動療法協会理事長。近年は、文化・芸術領域の力と医療・介護のエラボレーションの必要性を提唱し、とくに演劇的手法を用いて認知症患者の情動機能と認知機能を回復させる「演劇情動療法」の研究を進めている。



河合さつき Satsuki Kawai  
(公財)可児市文化芸術振興財団 事業制作課  
2011年公益財団法人可児市文化芸術振興財団に入職。可児市文化創造センターalaの広報やチケット業務をはじめマーケティング、ブランディングを担う顧客コミュニケーション室に配属。2016年同財団の事業制作課に異動。その後ala Collectionシリーズ、大型市民参加公演、多文化共生プロジェクトなどalaのプロデュース公演の制作を担当。2019年5月文化庁新進芸術家海外研修制度により英国のリーズ・プレイハウスにて40日間研修。

総括責任者  
下斗米 隆 Takashi Shimotomai  
NPO法人世界劇場会議名古屋理事長

アドバイザー  
山出 文男 Fumio Yamade  
NPO法人世界劇場会議名古屋 副理事長

コーディネーター  
細井 昭男 Akio Hosoi  
NPO法人世界劇場会議名古屋 理事

Coordinator

Greetings